



# Pure Pacific 純 No.213

## パ Jan.2021

純パの会会報『純パ』第213号

2021年1月30日発行 / 発行:純パの会

### 水島新司氏の「予言」

影山 一義

純パの会が誕生する1年前の、1981年1月9日。たばこをくゆらす西本幸雄氏が表紙の雑誌『ナンバー19号(1981年1月20日号)』が発売され、この号に掲載された宮田親平氏の「七たび生れ変わっても、我、パ・リーグを愛す」を読んで共感したというパ・リーグファンからの手紙が殺到する。それから1年後。今度は「熱バジャー」の見出しと当時のパ6球団をイメージしたユニフォームで吠える水島新司氏が表紙の雑誌『ナンバー19号(1982年2月20日号)』発売。見出し通りのパ・リーグ特集となったこの号には、『ナンバー19号をきっかけに宮田氏との交友が生まれた当時大学講師だった柳下貞一氏と芸能プロダクション勤務の奥好弘両氏が登場。柳下氏はセ・リーグにばかり人気偏る不公平感を「偏七値」という言葉で表し、奥氏は「毎日、パが一面報道する新聞を作りたい」と語る。そしてこの中で「純パの会」という単語が初めて登場するのである(なおこの頃一方では「パ・リーグ振興連盟」純パ・ファンの集い」とも表記されている)。

これらの記事をきっかけにして、読者からの入会希望が集まって、発起メンバー18名。そのうちの8名が新宿に集い「第一回懇親会・旗揚げの会」が行われたのが、今日に至る純パの会の歴史の第一歩とされている。

今思うと信じられないかも知れないが、この時の模様を紹介した新聞記事では、純パの会をこのように記した。

「観客が少ない、マスコミに軽視されている、よってマイナー視されているパ・リーグを応援し、パの黄金時代元年たらしめたいと願う熱バ狂の集まり」

この頃の会員の多くは、せめて同じプロ野球の中で「パ」と「セ」の間の不正感だけでも是正してくれと、そう願っていたに違いない。

ところで、この『ナンバー19号』45号のご縁がきっかけだったのかどうか定かではないが、会が誕生して5年後の1987年「全日本パ・リーグ党宣言」が発刊された際に、パ・リーグファンの著名人として水島新司氏にご寄稿をいただいている。その時の文章は、会報前号でもご覧いただけるのだが、前号を作っていた時に、まさに現在のパ・リーグを予言させる文章に気づいた。

「その球場で展開されている試合は壮絶であり、血湧き肉躍る興奮がある。毎日のようにテレビで見ると、セの野球など問題じゃないのだ。(中略) この熱い闘いを続けていけば必ずいつか逆転する。今やパのお荷物南海はまずその逆転の先陣をきらねばならない。すでにあぶさんは劇画界において常にAクラスなのだ。南海が強くなればパの人気は上がる……そしてその時こそパがセを逆転する時なのだ。見ていてくれ、これからの南海を!!」

残念ながら南海ではなく、ソフトバンクとしてではあるのだが、ホークスがまさにこれを実現させてしまった。はたして水島先生はこのことを覚えていらっしやるだろうか?と、ふと、思ったものである。

今から40年前、「パ」と「セ」の不正感を是正しようとして、パ・リーグファンが立ち上がった時代があった。

そして40年後の今日、「パ」と「セ」の間は逆転どころか、実力格差が問題になる時代にまでなったのである。